# お山の大将は
# コウタロー

### 見あきない猿ガ島

動物園のほぼ中央に位置する「猿ガ島」。ここを訪れるお客さんは、みんなニコニコしながらサル達をみています。おとなも子供も、日本人も外人さんも、シカメッツラをしている人はひとりもいません。1時間余りもあきずにみている熱心な人もあります。

しばらく時間をかけてみていますと、はじめはただ何となく歩いたり走ったりしているようにみえていたサル達も、それぞれ個性があり、目的をもって動いていることがわかります。まわりにいるサル達を気にしながら上を向いて、お客さんが投げてくれるビスケットを待っているサル。イノシシを自動車がわりにドライブを楽しんでいるサル。悲鳴をあげながら一目散に逃げているサル。その後を追いかけている2～3頭のサル。騒ぎを聞きつけて岩のてっぺんからゆっくりと、落ちつきはらって下りてきたシッポをたてているサル。すみっこでは、この騒ぎには無関心をよそおいながらもチラチラと目をそちらに走らせつつ、溝の下流でエサをひろっているサル……。

これからお話しますのは、このシッポをたてているサル――彼の名前はコウタロー君といいます――をボスにいただく猿ガ島でのできごとです。

ヨッチャンのドライブ

### サル社会のルール

コウタロー君は猿ガ島のボスです。ボスといえば何だかギャングの親玉のような感じがしますが、一番の権力者、という意味です。われわれ人間社会でいうと誰にあたるのだろう、などと考えないでください。かえってわからなくなると思いますので……。

コウタロー君が他のサル達と一緒に猿ガ島にやってきたのは、2年前の昭和45年でした。それ以前には別のサル達がここにいたのですが、恐るべき人間の伝染病がはびこってしまい、ついに壊滅してしまいました。人間の伝染病、それは結核です。結核がどうして猿ガ島にうつったのか疑問に思われるかもしれません。しかし、それは簡単です。お客さんが猿ガ島にタンやツバをはいたり、食べかけの菓子を投げたりするからです。

コウタロー君たちはアカゲザルという種類です。パキスタンから送られてきました。京都についた時には、ほとんどのものがまだみんな子供で、サル社会のルールやしきたりをよく知らないものが多く、そのために、けんかがたえませんでした。コンマ嬢はその中でも最もあわれな犠牲者で、ルールを全くしらなかったために仲間に咬みつかれ、けがばかりしていました。

サルの社会では、強いものが好きな食物を十分に食べ、弱いものは、強いものが食べ残したあとを食べます。お客さんがピーナツを投げ、ちようど待っていたサルの近くへ落ちても、そのサルは横を向いて関心のないような顔をしていることがあります。「アレッ、ほしくないのかナ？」と思っていると、どこからともなく別のサルがあらわれてゆうゆうとそれを拾い、口に放りこむと再びどこかへ消えてゆきます。待っていたサルは、彼の姿が見えなくなると、あわててその場所にゆき、残りものがないかと探し、ないとわかればまた餌をねだります。この様子をみていたお客さんは可愛そうに思い、また餌を投げますが何回投げても同じことのくり返しで、横どりするサルに腹をたてています。

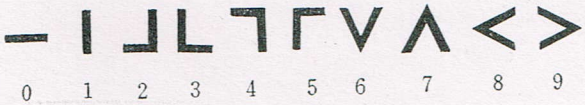
しかし、これはサル達にとり、大変大事な場面なのです。強いサルがおいしい餌を十分に食べることは、強い個体が栄え、弱い個体は淘汰される方向に向っているのです。強い個体が十分に餌をとって繁殖にあず

かることは、その種(この場合はアカゲザルという種)がますます栄えることになります。もし間違って弱いサルが先に餌に手をだすと、容赦なく制裁をうけます。このようにして、サルとサルとの間には強弱の順位が決っているのです。お客さんがピーナツを投げたとき、AというサルよりBというサルの方が先にピーナツをとれば、BはAより順位が上であるといえます。この方法を全てのサルについて行なえば、サル間の順位がはっきりします。これは、野生ザルの群れ構造を解明するときに行なわれる方法の1つです。

### 名まえと目じるし

コウタロー君やコンマ嬢のように、猿ガ島のサルにはみんな名前がついています。キンタロー、クロタロー、モコ、シャレ、マリリン、シケ、チャイ……。

名前をつけておくと管理をする上で大変便利です。マリリンが赤ん坊をうんだ、とか、キンタローはクロタローにいじめられてけがをしたなどといえば、すぐにわかるからです。しかし、サルの中にはよく似ているものもいますし、思い違いをすることもあります。サルの戸籍簿を作る上で、人間がうっかり間違えたばかりに、とんでもない記録ができたりすると、サル達に対しても申し訳がないので、名前の他にもっと確かな目印がつけてあります。上の写真をみてください。これはヤスタロー君というサルですが、胸の白いところにひらがなの〝く〟を鏡でうつしたような記号がついているのがみえますか。動物園の「かくし文字」です。下の図をみてください。記号と数字を示してあります。これにより、ヤスタロー君は9番であることがわかります。これのくみ合せにより、1頭ずつ番号をつけて記録をとると、正確なものができます。消えたり、はがれたりしないように、1頭ずつ麻酔をかけて、入れずみをしています。




### 飼育下のひずみ

昨年の6月12日、おタキさんは猿ガ島で第1号の子供をうみました。ところが翌日の13日朝、子供は頭を何物かにかみくだかれて、無残にも死んでいました。同じ日、チャイ子さんも赤ん坊をうみました。犯人は再び同じことをくり返すのではないかと考えて、交代で観察していました。それは午後4時半頃でした。突然1頭のオスザルがチャイ子さんに近よったかと思うといきなり子供を奪いとり、頭を〝ガブリ〟とひとかみし、山の頂上近くから下へ投げてしまいました。ほんの一瞬のできごとでした。みていた私たちは、あまりの驚きに、言葉にもならず、ぼう然と立っているだけでした。ようやく我にかえった1人が、投げつけられた赤ん坊を拾いに走りました。かすかに息をしています。レントゲンをとりますと、頭の骨が大きくずれています。可愛そうですがまず絶望です。しかし、息がある間は誰かが母親代りにならなければなりません。Y君がそれを担当しました。彼は悪戦苦闘をしながらも見事にこの子供を育てあげ、つい最近まで「おとぎのくに」のマスコットとして活躍していました。

この事件の犯人は、意外にも、群れの統率者、コウタロー君だったのです。翌日、コウタロー君は、猿ガ島から他へ移されました。まだ他にも出産をひかえているサルがいたので、出産シーズンが終るまで、しばらく頭を冷してもらうことになったのです。

今年のシーズンも、事件は続きました。チャイ子さんは3月17日に子供をうみましたが1週間後の3月24日朝、彼女は赤ん坊を2頭も抱いているのです。よくみると、アカメさんがそばでウロウロしています。うんだとたんに、チャイ子さんにとられてしまったものと思えます。このような誘拐事件は、その後もありました。おタキさんが、自分の子供の他にモコ子さんの子供もとり上げて、抱いていたのです。

野生の群れでは、普通、このような事件はおこりません。こういうことをくり返していると、アカゲザルという種が滅びてしまうからです。これは、飼育下でのひずみであろうと考えます。ひずみを生じた原因、それは先ず、2年前に入れたサル達がみんなあまりに若すぎたからだろうと思います。野生でも飼育下でも、群れで生活している時には、赤ん坊から一人前に育っていく過程で、いろいろなことを学びます。他のメスが子供をうみ、抱いてミルクを与える様子も、じっとみておぼえるのです。猿ガ島のサル達は、そういう教育がまだ十分になされていない幼ない段階で京都にやってきたため、大混乱に陥ってしまったのだと思います。

コウタロー君はボスらしく、そしてメスザル達は母親らしく成長してくれることを願っています。

（K.Y.）